【村田雅裕のスポーツ曲論】名門ＰＬ学園「監督」決まらぬ理由…強さのキモ「付き人システム」解体しても「結果」求められる二律背反

2014.4.29 12:00

部内の暴力事件など度重なる不祥事で昨年4月に前監督が退任したPL学園野球部（大阪）の監督人事が難航している。今年の大阪府春季大会は新監督が指揮する予定だったが、後任が決まらず、昨秋同様、野球経験がない正井一真校長が監督としてベンチに入った。

なぜ難航しているのか。新監督には「泥だらけになり、基礎から野球部を作り直す」という厳しい条件があるからだ。

PL学園の野球部寮では、上級生と下級生が同部屋で生活し、下級生が上級生のユニホームの洗濯やスパイク磨き、夜食の世話、自主練習の手伝いなどをこなす「付き人制度」と呼ばれる慣習がある。厳しい上下関係の象徴ともいえ、これが部内暴力の温床になっていると指摘されてきた。

OBでプロ野球巨人で投手として活躍した橋本清氏の著書「PL学園OBはなぜプロ野球で成功するのか?」（新潮文庫）の中では、ほとんどのOBが「金をもらっても、PLの1年生をもう1度やるのは嫌だ」と明かしている。

一方で、西武などで活躍した清原和博氏は「PLの1年生の寮生活を経験したら、野球のプレッシャーなんて、どうってことないと思えるようになった」、元阪神の木戸克彦氏は「寮生活で先輩が望んでいることに気づく訓練をしているから判断力が養われた。野球界で生きていく一番大事な“義務教育”を受けさせてもらった」と、その効果も挙げている。

すなわち、プロ野球で活躍した大物OBたちの中に「2度と体験したくはないが、あの経験がプロで生きている」との思いがあるため、部内暴力が何度あっても、学校側は本格的に付け人制度を見直さないできたのだろう。

だが、今回は違う。新入部員が入る前の今年2月末から約1カ月、野球部だけの朝礼を行い、「自分のことは自分でやる」という方針を念押したほか、保護者を集め、PL教団幹部による講演も行うなど制度の廃止に本格的に乗り出したのだ。新監督は学校側と二人三脚で、この改革を推し進めなければならない。

その上、名門野球部の指揮官として強化の方もおろそかにはできず、選手の“育成システム”でもあった付け人制度に代わるものを構築しなければならない。成績が芳しくなかったら、「生徒

を甘やかせたからだ」とすぐに批判されるだろう。相当な覚悟が必要だ。

　では、PL学園はなぜそこまでして制度に手を付けたのか。

　今の高校野球界は有力な中学生の獲得競争が激化しており、これが成績に直結している。同じ大阪で、甲子園で史上7校目の春夏連覇を達成した大阪桐蔭の寮は「同学年、同部屋」が基本。「自分のことは自分でやる」との方針で下級生の精神的負担を軽減している。時代が変わる中、付け人制度を存続させれば、もはや有力な中学生は入学してくれない。

　さらに、PL教団が関わる高校で、ひんぱんに部内暴力が起きている状態を放置すれば、「宗教法人としてのメンツがつぶれると考えたのでは」と指摘する関係者もいる。

　そんな状況を考えると、新監督にはOBで元巨人の桑田真澄氏が適任だと思っている。現役引退後、早大大学院に入学し、プロ野球の現役選手にアンケートを行い、体罰や精神野球の功罪を研究。「体罰不要」を強く訴えているからだ。

　桑田氏は現在、東大野球部の強化を手伝っているが、危機に瀕している母校の建て直しに一肌脱ぐ方が先決ではないかと思っている。（運動部編集委員）

© 2014 The Sankei Shimbun & Sankei Digital

© 2014 Microsoft